

# 日本語で中壘を語る

(中医日语)

主 编：张再良

副主编：栗田隆 三成由美

陈晓 姜德友 蒋明

上海中医药大学出版社

责任编辑 黄 健  
技术编辑 徐国民  
责任校对 郁 静  
封面设计 王 磊  
出版人 陈秋生

图书在版编目(CIP)数据

中医日语 / 张再良主编 .—上海: 上海中医药大学  
出版社, 2005 .11

ISBN 7 - 81010 - 918 - 9

.中 ... 张 ... .中医学-日语 .H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2005)第 127446 号

日本語で中壘を語る(中医日语)

主编 张再良

---

上海中医药大学出版社出版发行 (http://www.tcmonline.com.cn)  
(上海浦东新区蔡伦路 1200 号 邮政编码 201203)  
新华书店上海发行所经销 南京展望文化发展有限公司排版 上海申松立信印刷厂印刷  
开本 889mm×1194mm 1/32 印张 11.375 字数 284 千字 印数 1—1100 册  
版次 2005 年 11 月第 1 版 印次 2005 年 11 月第 1 次印刷

---

ISBN 7 - 81010 - 918 - 9/ R · 866

定价 28.00 元

(本书如有印刷,装订问题,请寄回本社出版科,或电话 021-51322545 联系)

## 编写说明

中医院校中学习日语的本科生、研究生,在完成了公共日语的学习之后,往往苦于在专业领域中还不能自如地进行表达和交流,故还有想在专业日语方面进一步熟悉和掌握的愿望。本教材就是针对这一情况,并结合多年《中医日语》的教学实践逐步编写而成的。

本教材的内容由三大块组成。第一部分为“基础理论篇”,主要围绕中医的基础理论展开,以“中基”和“中诊”的内容为主,并加入了中药学和方剂学总论的内容(包括药膳)。在每一章节后列出常用词汇表,并注有发音。第二部分为“临床基础篇”,主要以《伤寒论》和《金匱要略方论》的原文为主,根据内容作了适当的归纳整理。原文以直译的形式,未加发挥,以便熟悉日语古文的表达方式。篇中还加入了叶天士的《温热论》。第三部分为“附录”,收集了常用的相关名词术语,便于学生掌握发音。

本教材适合于中医院校学习日语的学生以及社会上有日语基础且对中医感兴趣者阅读和使用。

本教材的编写出版受到了上海中医药大学各级领导的支持和关心,日本留学生谷口直子、平川雅之、绿川汉树、田边ひろみ、小柳彩子等对本书提供了很多帮助,研究生杨文喆也协助做了不少工作,在此一并向上述人士表示真诚的感谢。

用日语确切地表达中医的内容,尚有许多方面可以探讨,本教材虽

然暂时得以出版,但存在的问题一定很多,祈望同道们的批评指正,以便在再版时改正。

张再良

2005年7月

## はじめに

日本語を第二外語として学ぶ中圃薬大の生や院生が使用できる日本語による中圃教材の編纂を、上海中圃大留時の恩師である張再良教授の計らいで、上海の日系外資診療所で診療に従事する私も微力ながらお手伝いさせていただくこととなり、このたび出版の運びとなりました。

主編者の張再良教授は、以前より中日の伝統圃交流に驛力されてこられました。中の中圃と日本の漢方の術交流ははるか長い歴史を有しますが、本書の出版により相互交流のための中における基礎環境がさらに整えられることが編者一同の願いでもあります。

中で最初から日本語で企された中圃書として、中在住の日本人の方々や、さらに機会があれば、日本の読者の方々にもご一読いただき中圃への理解を深めていただく一助になれば幸いです。

本書ではもともと難解な中圃の内容を、日本語で理解するために、その日本語表現の的確さを心がけました。今後、内容、表現等につきましては、より充実させてゆくため、読者の皆様のご意見、ご批評をいただいて改訂を加えてまいりたいと考えております。

最後になりましたが、本書の編纂にあたり、多くの方々にご驛力を得ましたことを感謝申し上げます。

栗田 隆

2005 年秋

# 目 次

## 基礎理論編

第一章 中區癘の癘 .....	1
一、基礎を確立した秦漢時代 .....	2
二、内容を充実させた唐宋時代 .....	3
三、倂系が 熟した明清およびその後の時代 .....	5
第二章 中區理論の特癘.....	8
一、整倂 .....	8
二、弁 .....	10
三、 動 .....	11
第三章 中區理論の基礎 .....	14
一、元氣説 .....	14
二、陰陽説 .....	15
三、五行説 .....	17
第四章 中區癘の人倂 .....	21
一、気血精津液 .....	21
二、臟腑 絡 .....	26
三、倂質 .....	31

---

第五章 中脛癘の病	37
一、病因	37
二、病機	43
第六章 中脛の診察法	47
一、診	47
二、聞診	50
三、問診	50
四、切診	53
第七章 中脛の弁法	57
一、綱弁	57
二、気血津液弁	67
三、臟腑弁	74
四、病邪弁	91
五、六弁	96
六、衛気血弁	100
七、三焦弁	102
、絡弁	103
第八章 中脛の治療法	107
一、治療原則	107
二、治療方法	111
第九章 中脛癘について	116
一、起源と展	116

---

二、産地と 集	119
三、瘻制	120
四、藜性	123
五、配合と禁忌	128
六、用量と 用方法	131
第十章 方 癘について	136
一、起源と 展	136
二、方 と治療方法	138
三、方 の 類	142
四、組 と 化	143
五、 型	146
第十一章 藜膳の概要	153
一、藜膳とは	154
二、藜膳の瘻	156
三、藜膳の食材	161
四、藜膳の性能	161
五、藜膳食材の配合	165
六、藜膳食材の調理方法( 型)	167
七、性質による食材の 類	169
臨床基礎編	
第一章 『傷寒論』六 病 治提綱	171
一、太陽病	171
二、陽明病	192

三、少陽病 .....	203
四、太陰病 .....	208
五、少陰病 .....	210
六、厥陰病 .....	215
第二章 『金匱要略方論』 治提綱.....	222
臟腑 絡先後病 第一 .....	222
痙溲癱病 治第二.....	227
百合狐惑陰陽毒病 治第三.....	231
瘡病 治第四.....	233
中風歷節病 治第五.....	235
血 虚勞病 治第六.....	237
肺痿肺癰咳嗽上気病 治第七.....	239
奔豚気病 治第 .....	242
胸 心痛短気病 治第九.....	243
腹満寒疝宿食病 治第十.....	245
五臓風寒積聚病 治第十一.....	248
痰飲咳嗽病 治第十二.....	252
消渴小 不利淋病 治第十三.....	257
水気病 治第十四.....	259
黄疸病 治第十五.....	265
驚悸吐衄下血胸満瘀血病 治第十六.....	269
嘔吐噦下利病 治第十七.....	271
瘡癰腸癰浸淫病 治第十 .....	276
跌蹶手指臂腫転筋陰狐疝蛔虬病 治第十九.....	277
婦人妊娠病 治第二十.....	278

婦人産後病	治第二十一	280
婦人雑病	治第二十二	283
第三章 『温熱論』論治提綱		287
一、温病の大綱		287
二、邪は肺衛にある		287
三、邪は気分に流連する		288
四、邪は三焦に留まる		289
五、溼邪を論ずる		289
六、邪は陽明に裏結する		290
七、邪は営血に入る		291
、舌診について		292
九、斑疹について		295
十、白癩について		296
十一、齒を聽する		296
十二、婦人の温病について		297

## 附 录

一、常用中藥名	300
二、常用方 名	313
三、常用食材名	326
四、常用癥位名	331
五、常用疾病名	340
六、常用解剖名	345
主要 考文藝	349

# 基礎理論編

## 第一章 中區癩の癩

中医癩は、中国における数千年の癩 的経験を 括したものであり、疾病に対する豊富な経験と理論的知識が含まれている。中医癩について、現存する文献は6000種類以上を数え、中医臨床の治療方法も多 で、薬物を 用する以外に癩灸・推拿・導引・外治などがある。薬物の種類も 常に多く、一般に流布している本草書の記載でも2500種類前後に達する。

中医癩を癩 的に癩ると、次のように認識することができる。

先ず、医药は日常生活や生産労働の中から生まれてきたものであることを理解しなければいけない。はるか古代から、生産労働に従事したり、自然災害・ 邪・猛獣などに対処する中で、疾病を予防し治療するという活動が行われてきた。食用になる植物を求める過程で、あるものは食後に反応が起きるので、食用にはならないが次第に薬用できるとの認識に至ったのが、植物性の薬物による疾病の予防と治療の起源であった。また、石器を生産工具として应用すると同時に、砭石や骨癩で膿瘍などを刺して排膿や瀉血を行ったのが、癩刺療法の起源である。火に当たって温めたり按摩すると快適になり痛みが止ったりすることも次第に治療に应用されるようになり、これが灸法や推拿療法の起源となった。以上のように、自然発生的な医療活動の中で経験に経験を重ねて、やがて一つの認識あるいは理論

にまとめられるようになり、文字によってこれを記し、後世の人々に伝えられるようになった。

文字的な記がある癰からみると、中医癰のり立ちは、大体次のような三つの段階から起っている。

## 一、基礎を確立した秦漢時代

### 1. 理論

中医学の基礎理論を築く文藝的なものは、『黄帝内』という書物である。『黄帝内』の編纂は、一般に戦国時代から始まって前漢に至り完了したと考えられている。この時期の医学経験をまとめたものであるため、ただ一人の手によってできあがったものではなく、論議に相互の食い違いもよく見られる。理論の面では時に流行した陰陽五行説によって、人候・病気・治療などを解釈したものが多くである。今日の中医学基礎理論の中では、陰陽五行・気血津液・腑絡・病因病機・治療原則など一番基本的なものは、すべて『黄帝内』からのものだと言える。

### 2. 臨床

後漢末年に張仲景が『傷寒雑病論』という書物を著した。その中で時の疾病に対する予防と治療の豊富な経験と医学理論の知識をまとめた上で、自らの臨床経験を結びつけ、疾病を傷寒と雑病に大別して記述し、臨床治療の原則であるところの、いわゆる弁論治を確立した。この書物は、今日では『傷寒論』と『金匱要略方論』の二冊に分けられ、それぞれは外感熱病(急性病)と内傷雑病(慢性病)を論じる内容となっている。張仲景は六弁を定めることで、中医学臨床の展に多大な貢献をした。

薬物の書物としては、漢代に書となったと考えられている『神農本草』がある。この書物は漢代以前の薬物に関する知識をまとめ

ており、収蔵された薬物は365種類にのぼる。その内訳は、植物薬が最も多く252種類、動物薬が67種類、鉱物薬が46種類である。『神農本草』は現存する匱癘文藝の内では最古の薬物癘の書物である。

方 の書物としても、やはり張仲景の『傷寒雑病論』が一番最初の倭系的な書物といえる。麻黄湯・桂枝湯・白虎湯・承気湯・小柴胡湯・大柴胡湯・理中湯・四逆湯・五苓散など 多く、方といわれるものは全てこの書物からの方 であり、今日の臨床でもよく愛用されている。

## 二、内容を充宍させた唐宋時代

### 1. 蓄積

薬物(方 )と病気についての認識は、この時代において落ち葉のように次第に積み重ねられていった。薬物の方面では、『神農本草』の365種類から、梁代の『名匱別』の730種類まで増補された。唐代には の組織力によって『新修本草』を編集し、659年に完させて全 に配布した。この本は中 の レベルで刊行した第一の薬典であり、また世界でも最も古いものである。『名匱別』から李時珍の『本草綱目』までの期間に、薬物癘を全面的に改訂する試みが集団により5回、個人により4回行われた。薬物の種類も新たに増補され、内容は次第に充宍してレベルが向上していったことがうかがえる。製薬科癘や薬物の加工・瘦製などの知識も、秦漢から唐宋にかけてますます 富になった。

庀く処方を収 した『傷寒雑病論』は「方書の祖」と言われたが、その後も 々な方書が出版された。唐代の『千金要方』・『千金翼方』・『外 秘要』、宋代の『太平聖 方』(方 集録 16834 首)・『聖濟 』(20000 首 上)・『和 局方』(788 首)・『濟生方』・『本事方』などは、どれも本格的な方書であり、 が多い。これらの本は、その時代の 匱 たちの臨床 験をまとめて、保存しているものであり、貴重な文

弊になっている。

病因・症候についての専門書も次から次へと出版された。例えば、隋代・巢元方らの『病源候論』には、疾病と症候の記載が1700以上もあり、病気の原因と候が詳しく記述されている。宋代・陳無执の『三因极一病方论』では、疾病の生原因として内因・外因・不内外因の三種を示し、三因癘説を提唱した。験を積み重ねた上で、病に対する認識・類も詳しくなり、複雑な状態に至った。

## 2. 論

宋代以降には、中医学の流がおこり、癘術上の論が盛んになった。このような癘術論は以後も盛んになり、癘癘の進歩を促進した。この中では「金元四大」がよく知られている。具体的に言えば、劉河間(完素)は、「六気みな火に従いて化す」「五志の過極はみなよく火を化す」とし、寒涼薬を主に用い、寒涼の代表となった。張子和(従正)は、「邪去ればすなわち正安んず」として、汗・吐・下による驅邪を主俵にし、攻下の代表となった。李東垣(杲)は、「土は万物の母たり」として、脾胃(土)の補益を主とした治療を行い、補土の代表となった。朱丹溪(震亨)は、「人の陽は常に有余し、陰は常に不足す」と考え、滋陰を主俵に治療し、滋陰の代表となった。これらの癘は独自の治療験を持ち、「古方は今の病を治すことあたわず」と考えるようになり、異なった見解のもとに論を展開して、癘癘理論と臨床治療の内容を充宓させた。例えば寒涼は、外感熱病の治療を辛温から辛涼に化させはじめ、これにより臨床治療の方法は重大な転換を迎える。これが次第に温病癘説へと展開していった。そして外感熱病についての認識はより深くなり、診と治療も大きく進歩した。また補土は温補へと展開し、趙養葵・張景岳らが命門癘説を提唱し、腑腑理論に新たな内容を加えた。

### 三、倭系が 熟した明清およびその後の時代

#### 1. 定形

明清の時代は、中 古代社会(封 社会)の末期で、 千年の癩 を んだ中區癩は 熟するに至った。萬物の本としては、『本草綱目』、方 的な書物は『普濟方』(61739 首)、内科的なものでは『景岳全書』などがあり、全て前代のものを倭系的にまとめたものである。外感熱病の治療については、明代に吳又可の『温疫論』、清代に葉天士の『温熱論』・吳鞠通の『温病 辨』などが出て、衛気 血弁 ・三焦弁 という新しい弁 方法を考え出した。このような治療理論は、『傷寒論』の六 弁 の不足を補充して、外感熱病の治療を完璧なものにした。診 の面では、舌診の内容はこの時代で倭系的なものになった。関係する書物としては、『傷寒舌癩』・『舌癩弁正』・『 診遵 』などがある。また臨床各科についての治療、専門的な病気の治療などについても詳しい内容まで進 が んだ。

#### 2. 融合

明の時代の後、西洋癩癩がどんどん我が くに導入されるようになり、中西癩の摩擦・合流などがしばしば起きた。この時代には一度、中區癩止案を提出されたこともあるが、実際の臨床では中西癩結合の治療が 頭していった。今の中 では、癩療の力としては、西洋癩癩・中區癩・中西結合癩癩という三つのものがある。また中西結合には、西癩中もあれば中癩西もある。しかし、病気を克服するために、癩療関係 が患 の立場にたち、中西癩ともに協力しなければならない。その新しい方法から花を咲かせた 野としては、針麻醉・中西癩結合での急性腹症や骨折の治療などが知られている。確かに、五・六十年前と比 すると、中區臨床の範囲はかなり縮小した

が、治療の有 性という強い生命力をもつ中医学は、今日でも依然として難病の治療に大きな役割を果たしている。

言葉：

- |                     |                      |
|---------------------|----------------------|
| 1. 疾病(しつぺい)         | ほうろん)                |
| 2. 瘡灸(しんきゅう)        | 24. 病原候論(しよびょうげんこう   |
| 3. 推拿(すいな)          | ろん)                  |
| 4. 砭石(へんせき)         | 25. 三因極一病 方論(さんいんきよ  |
| 5. 骨癰(こつしん)         | くいつびょうしょうほうろん)       |
| 6. 按摩(あんま)          | 26. 景岳全書(けいがくぜんしょ)   |
| 7. 自然災害(しぜんさいがい)    | 27. 温疫論(おんえきろん)      |
| 8. 黄帝内 (こうていだい)     | 28. 温熱論(おんねつろん)      |
| 9. 神農本草 (しんのうほんぞうけ  | 29. 温病 辨(おんびょうじょうべん) |
| い)                  | 30. 傷寒舌癰(しょうかんぜっかん)  |
| 10. 名匾別 (めいべつろく)    | 31. 舌癰弁正(ぜっかんべんせい)   |
| 11. 新修本草(しんしゅうほんぞう) | 32. 診尊 (ぼうしんそん)      |
| 12. 本草綱目(ほんぞうこうもく)  | 33. 張仲景(ちょうちゅう)      |
| 13. 千金要方(せんきんようほう)  | 34. 陳無沢(ちんむたく)       |
| 14. 千金翼方(せんきんよくほう)  | 35. 劉河間(りゅうかかん)      |
| 15. 外 秘要(げたいひよう)    | 36. 張子和(ちょうしわ)       |
| 16. 太平聖 方(たいへいせいほう) | 37. 李東垣(りとうえん)       |
| 17. 聖濟 (せいざいそうろく)   | 38. 朱丹溪(しゅたん)        |
| 18. 和 局方(わざいきょくほう)  | 39. 李時珍(りじちん)        |
| 19. 濟生方(さいせいほう)     | 40. 吳又可(ごゆうか)        |
| 20. 本事方(ほんじほう)      | 41. 葉天士(ようてんし)       |
| 21. 傷寒雜病論(しょうかんざつびよ | 42. 吳鞠通(ごきくつう)       |
| うろん)                | 43. 提唱(ていしょう)        |
| 22. 傷寒論(しょうかんろん)    | 44. 頭(たいとう)          |
| 23. 金匱要略方論(きんきようりやく | 45. 結合(けつごう)         |
|                     | 46. 融合(ゆうごう)         |